

特集 新しく発生した病害虫（害虫編）

1 タバココナジラミのバイオタイプQの発生と対策

はじめに

本県のハウストマト栽培において、重要害虫はコナジラミ類（タバココナジラミ・オンシツコナジラミ）である。近年、西日本において、タバココナジラミの中で外観では区別できず、遺伝子型や寄主植物への影響が異なるバイオタイプの一つとして、薬剤感受性の低いバイオタイプQ（以降、タバココナジラミを省略し、バイオタイプのみ記載）が発生し問題となっている。兵庫県では2006年11月にハウストマトから採集した個体群から初めてバイオタイプQの発生を確認し、併せて、基幹防除剤であるIGR剤の感受性を検討した。

内容

（1）バイオタイプQの分布

県内のハウストマト栽培において、慣行の薬剤防除で効果が低いタバココナジラミ類を10頭以上採集し、PCR法でバイオタイプを同定した。その結果、2006年11月に県下で初めて姫路市内の採集個体群からバイオタイプQの発生を確認した。2007年の調査では、神戸市、三木市のハウストマトから採集した個体群でバイオタイプQの発生を確認し、県下での分布の広がりを認めた。

（2）バイオタイプQの薬剤感受性

供試虫はバイオタイプQばかり発生している姫路市のトマトハウス3棟から採集した。ワタのり

ーフディスクを入れたプラスチック容器にタバココナジラミの成虫10頭を入れて24時間産卵させ、0～1日齢卵を準備した。成虫除去後、プラスチック容器に所定濃度のIGR系A薬剤を注入し、25℃の恒温器内に静置し、処理8日後の孵化状況を調査して卵～幼虫期の死虫率を求めた。累代飼育している感受性系統のバイオタイプBの死虫率と比較した結果、IGR系A薬剤に対する薬剤感受性は著しく低かった（図）。

今後の展望

兵庫県下においてバイオタイプQの発生が確認され、生息地域の拡大がみられている。「薬剤を散布してもタバココナジラミが死なない？」こんな現象が見られた地域では、バイオタイプQの発生を疑って、ハウス開口部に0.4 mm目合いのネットを張ったり、粘着トラップによる捕殺、バイオタイプQに有効な薬剤散布など、防除対策に万全を期してほしい。2008年は普及センターと協力して、薬剤感受性を調査しながら、バイオタイプQを「入れない。増やさない。出さない。」の考えで、物理的防除や耕種の防除を含めた総合防除対策を展開していく計画である。

山下 賢一（企画調整・産学官連携部）

（前 農業技セ・病害虫防除部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

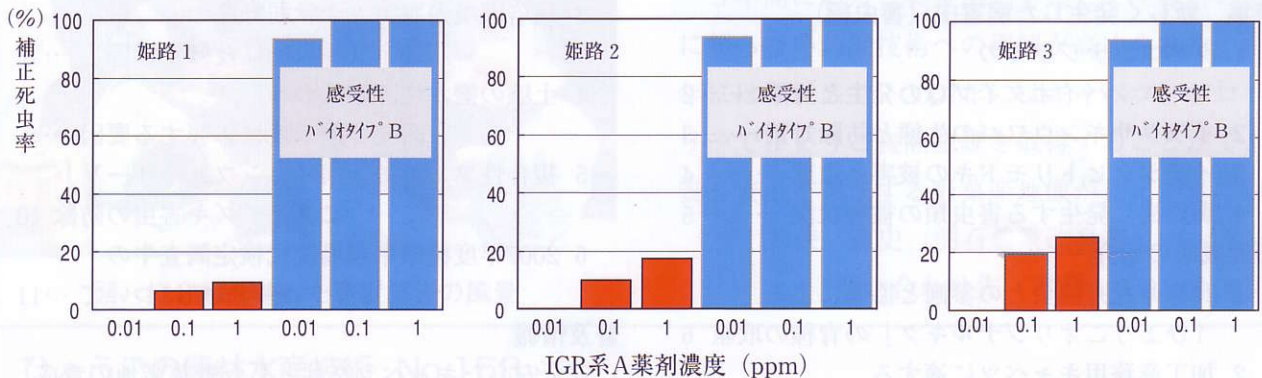


図 IGR系A薬剤のバイオタイプQに対する感受性比較（注 姫路市内のハウス3棟の結果）